

Scientific Fantasy SM

ミスリル サーガ

鬼畜のゴールデンパス ～聖巫女強制絶頂

ミスリルの悲劇 ～姫姉妹と王妃の三連虐

ミスリルの虚妄 ～繁殖寵姫の権謀術数



Presentede by

Horikado Nagayasu

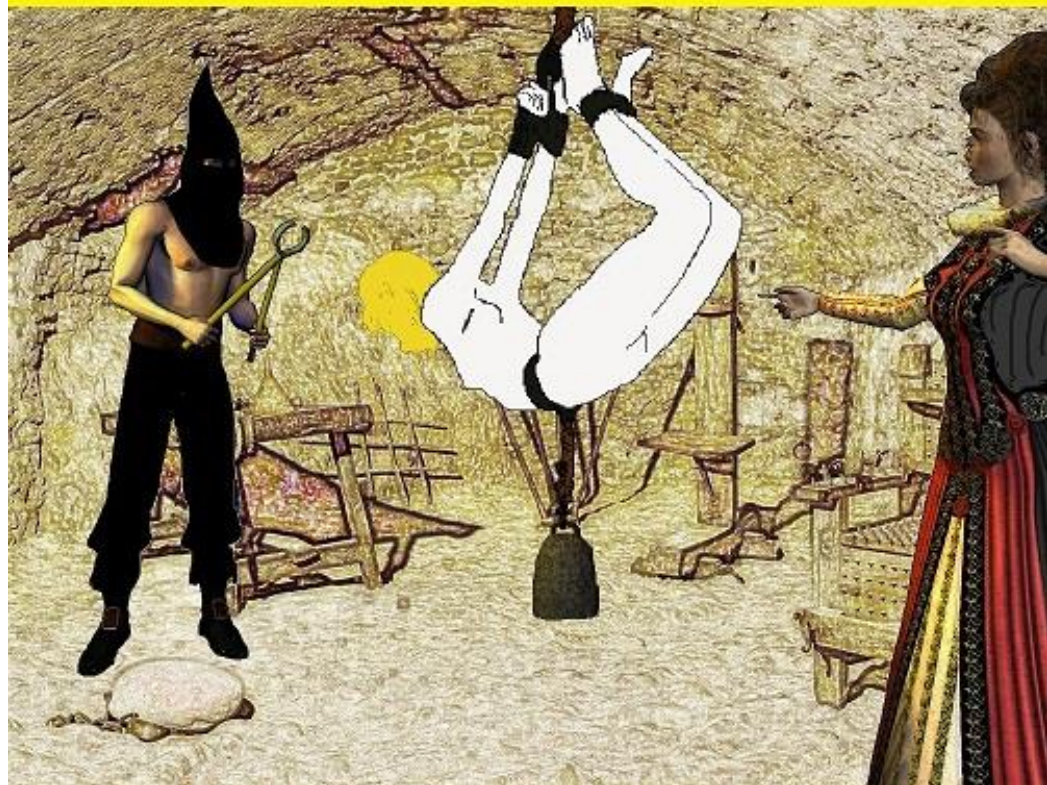
目次

序章：鬼畜のゴールデンパス.....	- 4 -
1. 選別の儀式.....	- 5 -
2. 征服王の要求.....	- 10 -
3. 王錫の洗礼.....	- 12 -
4. 淫虐の牢獄.....	- 15 -
5. 破滅の時.....	- 19 -
6. 滅びのタペストリー.....	- 23 -
7. 運命の果て.....	- 26 -
ミスリルの悲劇.....	- 28 -
1. 亡国の母娘.....	- 29 -
2. 虜囚の屈辱.....	- 44 -
3. 妹姫の拷問.....	- 56 -
4. 公邸の略奪.....	- 68 -
5. 公妃の淫舞.....	- 76 -
6. 姉姫の肛虐.....	- 83 -
7. 姉姫の屈服.....	- 89 -
8. 落胆の真実.....	- 98 -
9. 妹姫の破瓜.....	- 108 -
10. 野望の調教.....	- 125 -
11. 母娘の性務.....	- 141 -
12. 白銀の凱旋.....	- 162 -
ミスリルの虚妄.....	- 171 -
1. 屈辱の行軍.....	- 172 -
2. 恥辱の寵姫.....	- 174 -

3. 正妃の嫉妬.....	- 191 -
4. 御前試合.....	- 204 -
5. 最初の手駒.....	- 218 -
後書き	- 226 -

鬼畜のゴールデンパス

～聖巫女強制絶頂



1. 選別の儀式

全裸で仰臥する黒髪の少女。その白い肌に伽巫女の指が触れる。

「あ……」

くすぐったさに少女の身体がびくんと震えた。

「時を紡ぐ母神よ。空間を綾なす父神よ。この幼き肉体に祝福を与え給え」

子守唄のように低くゆっくりと唱えながら、伽巫女の掌がかすかな膨らみを包み、その指がピンクの小さな果実を優しく捏ねくる。

「あ……ふうん」

少女の吐息に艶やかな響きが混じた。

伽巫女の片手が無毛の股間を撫で下ろし、鋭敏な突起に達する。

「くう……ん」

伽巫女は幼い肉に埋没した突起を掘り起こし摘み出して、指の腹で転がす。

「巫女様……わたし、変になっちゃう。破裂しちゃいそう……」

儀式を見守っていた祭祀長が、わずかに身を乗り出した。

「父母神よ。今はまだ、この幼き者の心を召し給うな。ただ嘉し給え」

「父神よ。空間の横糸をこの幼き者の手に握らせ給え。母神よ。時間の縦糸をこの幼き者の足に辿らせ給え」

祭祀長だけではなく、儀式に立ち会う売巫女も祀巫女も詠唱に加わった。

そうして。選ばれし女性たちが見守る中、少女は小さな頂に登り詰めた。

「破裂しちゃう。怖い……でも、気持ちいいよう……ああつ、巫女様あああああつ！」

やがて。少女はゆっくりと高みから現世へ降り立つ。

「何か見えましたか？」

まだ夢見心地から醒めていない少女に、祭祀長が優しく訊ねた。

「あの……よくわかりません」

「間違っことを言うのではないかと恐れてはなりません。神はさまざまに形を変えて御姿をお顕わしになるのです」

励まされて、少女は今しがた見た幻を思い出そうとする。

「暖かな青い帯のような……薄い雲のような……そう、厚みのない霧。おかしい言い方ですけど。それがあたしを包んでいました」

「その霧は、どこまで広がっていましたか？」

「ええと……広がるとか、そんなんじゃないで、ただぼんやりと、そこにあったんです」

祭祀長の顔にかすかな落胆が浮かんだが、すぐ慈愛の笑みに戻った。

「この幼き者は、望むならば売巫女に聖別されるでしょう」

密やかな吐息が性壇の間を流れた。祀巫女の吐息には羨望が、伽巫女のそれにはかすかな失望が、それぞれに混じっていた。

——黒髪の少女は身を清められ、元の衣服を身にまとい、立会いの巫女に引率されて部屋を出て行った。

暫時の休息の後、金髪の少女が新たな立会人とともに招じ入れられた。

金髪の少女もまた、衣服を脱いで性壇に横たわった。

父母神への祈りを捧げながら、伽巫女の指が少女の裸身に触れた。しかし、少女はまったくの無反応。乳首を摘まれるとくすぐったいらしく、かすかに身をよじったが、快感は生まれていない。肉芽を転がされてさえ、目を閉じたまま静かに仰臥していた。

初潮を迎えたのであれば、すでに子を宿せる身体である。性的な刺激を受けて何も感じないはずはない。選別の儀式で幻を見ること叶わなかった祀巫女ですら、肉体の快感は得ているのだ。

祭祀長の指たる伽巫女の目に焦りの色が浮かんだ。十年来勃起不能だった老人の怒張をも甦らせ、涸れ果てた肉壺からも歓喜の泉を迸らせる黄金の指が、この初心な肉体に通じないなど、ありえないことだった。

伽巫女の詠唱に催淫の調べが交じり、両手が少女の急所を執拗に責め立てた。

それでもなお、金髪の少女は人形の如くに横たわっている。

伽巫女が困惑の色をにじませて祭祀長を振り仰いだ。

「わたくしが替わりましょう」

異例のことではあったが、異を唱える者はいなかった。

祭祀長が首座から立って、少女に近づく。丸めた指で少女の胸に触れた。乳房というには、あまりに幼い膨らみ。

その頂点を、ぴちっと指で弾いた。

「ひいっ……！」

少女は身をよじったが、すぐ元の姿勢に戻った。巫女の資格を見定める神聖な儀式を妨げるべきではないと——少女は、胸を庇おうとはしない。

その無防備な乳首が、成熟した娘のそれにも似て屹立していた。

反対側の乳首も弾いて少女に再びの可憐な悲鳴を上げさせてから、祭祀長の指が下腹部に滑った。

みたび、祭祀長の指が少女を弾く。

「きゃああっ……」

居合わせた巫女たちが思わず眉をしかめたほどの絶叫。しかし少女は健気にも、儀式に身を委ねている。

「はああ……」

少女の唇から妖しい吐息が漏れた。そして——下の唇から蜜が滲み出た。

祭祀長が、ひとりかすかにうなずいた。石炭の塊は、小さな炎を近づけたくらいでは燃えない。しかし、いったん着火すれば、鉄をも溶かすほどに灼熱するのだ。祭祀長は、その優美な顔には似つかわしくない荒々しい仕草で少女の身体を弄んだ。

それまで静かに横たわるばかりだった少女が一転して、乱暴な愛撫に全身で応えた。上体をよじり腰を突き上げて、悦びの悲鳴を喉から迸らせた。

「あああっ……もっと、もっと強く……虐めて、虐めてください」

祭祀長の指が少女の肉芽を捉えて、したたかに抓った。

「ひいひいひいっ……きひい！」

がくんがくんと少女の身体が性壇の上で跳ねて——そのまま動かなくなった。

一同は沈黙の中、少女が息を吹き返すのを待った。何か尋常でないことが起きている。あるいは起きようとしている。

かすかにゆっくりと上下していた胸が一瞬痙攣して。少女は、ぽっかりと目を開いた。

「何か見えましたか？」

祭祀長の問いに、少女が大きくなるはずく。

「目を開けていられないほどの目映い光……真っ白な、模様のない織物……それが後ろからあたしに迫ってきて、まるで針みたいに細くなって。腰を、あのその……祭祀長様が抓られた、あそこを突き抜けて……ずうっと前のほうへ広がっていきました」

「広がっていった先は、どうなっていましたか？」

少女は夢を思い出す目つきになって。

「わかりません。だって……どこまでもずうっと広がっているんですもの。

おお——と、祭祀長が息を呑んだ。

伽巫女さえ知らない経典の奥義に基づくのであろうか。祭祀長の微に入り細を穿った質問が少女に浴びせられた。

その織物に糸は見えたのか。わずかでも模様はなかったのか。後ろと前とでは、どちらが広がったのか。時に少女は自信を持って答え、時には忘れたか気づかなかったかしたことを詫びた。

質問の嵐を収束させると、祭祀長はうやうやしいとさえいえる態度で少女を助け起こした。

「大人になって、真の女人の悦びを知ったとき、その純白の織物には、悦びを教えてくださった殿方の運命——伽巫女が観じる幾つかの選び取れる運命ではなく、あり得べからざる運命までも含めた壮大なスペクトラムが刻まれるでしょう」

ここで祭祀長は胸に聖印を切った。

「父神よ。願わくばこの幼くして聖なる者を、偉大なる王に巡り合わせ給え。母神よ。願わくば、この幼くして聖なる者を、黄金の未来へと導かせ給え」

それは、聖神殿の栄光を輝かせ、現世の至福を人々にあまねく分かち与える祈願ではあったが——ひとりの少女に背負わせるには残酷でさえある使命だった。

「この者は、ただいまより聖巫女として神に捧げられます」

おおおっと、わずか三人の声が性壇の間を震わせた。先の聖巫女から六十七年ぶりの奇跡であった。

巫女たちが感涙にむせぶ中、当事者の少女はおびえた表情で四人の大人を見上げていた。祀巫女や売巫女には、選別を受けた後に希望した者だけになる。しかし、伽巫女を拒否することはできない。自分は伽巫女より上位の、伝説でしか聞いたことのない性職に就くのだと、歓喜よりは底知れない恐怖を感じていたのだ。

2. 征服王の要求

はるか北方の蛮族の長にしか過ぎなかった若者が、屈強な肉体と武術の才とを発揮して周囲を従え、さらには緻密な戦術で自分より強大な部族までつぎつぎと打ち破って一大王国を築き、運命の女神の依怙最良にも助けられて、その覇業は中心世界を脅かすまでにいたり——ついには聖神殿に矛先が突きつけられるに至った。

逆らう者は残虐きわまりない手段で皆殺しにする反面、恭順を誓う者からは財産の半分しか奪わぬ慈悲深さを持つ征服王であった。聖神殿への要求は、ただひとつ。

男の運命を読める巫女は、すべて差し出せ。さもなくば、全員を奴隷として連れ帰る。

聖神殿の所属する小公国はすでに征服王の足下にある。わずか五百人、それも構成員の九割までが女性である聖神殿には、戦う力などなかった。

「祭祀長様、そして皆様。お世話になりました。いよいよ、運命のタペストリーを織る日が参りました」

宝飾などは一切なく、淡い色彩の薄物を重ねてはいるが肌の透けて見える巫女服に身を包んで、聖巫女は皆に別れを告げた。背後には、聖巫女よりもさらに透けた衣装をまとった二十人ほどの伽巫女が悄然と並んでいる。

兵士が正装で望むのだから神殿側も正装で望むべし——征服王の要求に従ってのことだが、それはまさしく、蛮族に囚われた半裸の美女の構図だった。

「祭祀長様。晴れの門出に涙はふさわしくありませんわ」

聖巫女が微笑んだ。彼女とて、不安がないわけではない。けれど。今の世の中において、征服王以上に偉大なる——と言って悪ければ、世界の運命を左右できる男が他にいようか。征服王こそ、聖巫女が捧げられるにふさわしい相手なのだった。

見送りの巫女たちは涙を拭いて、無理に笑顔を作った。

巫女たちの中には、朋輩に肩を支えられてやっと立っている者も少なくない。これも、

征服王の暴虐の結果だった。

参詣客と肌を合わせ、稀に運命の一片くらいを垣間見せる売巫女は無論、そういった能力は無く、日常の神事や雑務にたずさわる祀巫女までが兵士の過酷な要求に応じさせられて、心身ともに極限まで消耗していた。重症を負わされ見送りの列に加われない者も十指に余る。

「出発用意！」

征服王の号令が聖神殿の庭に轟いた。

聖巫女は兵士たちの手で征服王の馬上に押し上げられ、背後から抱きつく形に手首を扼された。他の伽巫女たちは、手枷を掛けられて檻馬車へ放り込まれる。彼女たちは、帰国して後に分配される戦利品だった。

それでも彼女たちの境遇は、人質として差し出された小公国の姫君や、切り取り勝手の平民女たちよりは、ずっと恵まれたものになるはずだった。最初に絶頂を極めさせられた男の運命を読み取り、共感能力の高い巫女は男にもそれを幻視として分かち——運命の岐路を過たず乗り越えさせる。いわばおのれの未来地図を粗略に扱う者などいるはずがない。

ちなみに。白紙に描かれた地図を、他の男の地図に塗り替えることはできない。そして、売巫女も含めて、わずかでもそのような能力が発現するのは、聖神殿に属する一族に限られていた。だからこそ、聖神殿がこれと見込んだ英雄や王侯貴族に献上される場合を除き、伽巫女を購うには同じ重さの金が要求されることも珍しくない。

ましてや、百年にひとり現われるかどうかという聖巫女ならば。世界中の富と同じ価値があるのだった。

征服王は、ついに世界帝国の礎を手に入れた——はずだった。

3. 王錫の洗礼

遠征の兵士たちにおのれの威光——背後から抱きつく聖巫女を見せた後に、征服王は聖巫女をも檻馬車へ移した。ひとつには、いつまでも女といちゃついては威厳に関わり、いまひとつには、女が一向にいちゃついてこないからであった。

檻馬車には、貴人の乗り物のような緩衝装置は無い。何世紀も前から手入れされていない石畳の路面にガタガタ揺られながら、中心世界の北端に築かれた副王都へ運ばれるまでに、大半の伽巫女は体調を崩していた。ひとり聖巫女だけが、父母神の格別の寵愛を受けているごとく、毅然としていた。たとえ檻馬車の床に開けられた穴からの排泄を強いられようと、不浄を清めることすらかなわなくとも。

副王都に着いた伽巫女たちは、薄汚れた巫女服を剥ぎ取られ、しかし新たな衣服も与えられず、宝石や黄金、あるいは切り取った土地の安堵状と同列に扱われて、遠征で功績のあった將軍や留守を預かって国を治めてきた諸大臣に下げ渡されていった。

そうして聖巫女だけは——地下牢に幽閉されたのだった。

「生娘に閨の悦びを仕込むほど、陛下はお暇ではない」

北方蛮族に特有の分厚い毛皮のコートに身を包んだ若い女が、寒さで裸身に鳥肌を立てながらも、石造りのベッドに優雅とさえいえる姿勢で座っている聖巫女に告げた。

「陛下のご不興を買わぬよう、わらわが仕込んでくれようぞ」

「ぎよ、御意のままに……」

ベッドから降りて片膝を突き、全裸の身で優雅に一揖したものの、聖巫女の声は震えていた。目の前の蛮族女は征服王の正妃だった。牢番は、そう呼ばわった。

聖巫女が俗世の権威に恐れ入ったのではない。

聖巫女に別せられてからの五年間、彼女は性職者としての修行を積んできた。面と向かい合った相手の感情を読み誤ることはない。正妃から吹き付ける悪意と嫉妬は、聖巫女を呪い殺すほどの凄まじさだった。

このまま地下牢で拷問に掛けられて殺されるかもしれない。それもまた、父母神の定め給うた運命ならば、甘受するしかない——と、覚悟を固めた。

「売女を引き出せ」

正妃が短く冷たく牢番に命じた。拷問人と思しき屈強な男を呼び寄せる。

聖巫女は拷問人に追い立てられて——というよりもみずから、幅広の梯子を寝かせたような拷問台に横たわった。手足を大の字に縛り付けられ、梯子が中ほどから折れて逆V字形にされても、聖巫女はわずかに苦痛の呻きを漏らしただけで、赦しを乞いはしなかった。彼女がどれほどの苦痛に耐えているかは——淫裂の上半分だけを覆うささやかな金色の叢が風もないのにふるふると震え続けているのを見れば想像に難くない。

「これは陛下からお借りした王位の錫杖であるぞ」

鶏の卵ほどもある深黄の宝玉を象嵌した杖が、聖巫女の鼻先に突きつけられた。

「陛下の分身である。これにて、そなたを女にしてやろう」

「……ありがとうございます」

それは、聖巫女としての精一杯の抵抗だった。

はたして、正妃は拍子抜けした顔になった。

「脅しではないぞえ。これを、この宝玉をそなたの女壺に突き挿れてくれるぞ。どんなに苦しいか、生娘には想像もつかぬとみえるな」

「おそれながら……」

背骨がきしむ痛みをこらえて、聖巫女は口元に微笑を浮かべた。

「わたしはこれまで殿方のお相手を、付け加えるなら御婦人のお相手も務めたことはございません。ですが、どのようにも殿方を受け挿れ、自他ともに愉悦の高みに飛翔する術を磨いてきました」

現代風に言えば、バイブしか挿れたことがないから処女だよ——という理屈だろうか。ともかくも粘膜と粘膜との接触がないかぎり、聖巫女の能力が発動されることがないのは事実だった。

「征服王陛下の分身で貰っていただくことで、陛下の側妾であると認めていただけるので

したら、身に余る幸せでございます」

「おのれ。幸せかどうか、思い知るがよい！」

正妃は逆上して、宝玉の先端を聖巫女の女芯にあてがうと、ひと息にねじ込んだ。

鶏の卵ほどの大きさではあるが、宝玉にはカッティングの稜線がある。土台に固定するために黄金の枠が取り巻いている。それらの突起で肉襞を抉られては、殿方を受け挿れる修行など役に立たない。

「ぎゃああああっ……！！」

逆V字形に折り曲げられて梯子に押しつけられていた腰が宙に浮いて、びくんびくんと痙攣した。悲鳴が途絶えたとき、どさっと腰が梯子の頂点に打ち当たって、聖巫女は失神していた。ねちねちと駈られるよりはよほど楽な陵辱だった——と、そこまで計算していたわけではなかったのだろうが。

「思い知ったか」

正妃は子宮を突き破るほどに深く突き挿れ、捏ねくりまわし、ようやく王錫を引き抜いた。深黄の宝玉は朱に染まっていた。

4. 淫虐の牢獄

それで正妃の妾いびり（というには凄絶過ぎたが）が終わったわけではなかった。むしろそれから、夫の残虐さも顔負けの本領発揮だった。

聖巫女が失神しているあいだに医師が呼ばれて、止血の処置だけは施された。正妃としても、夫が手に入れたばかりの玩具を壊してしまう蛮勇は持ち合わせていないようだった。あくまでも、夫が気に入るように聖巫女を調教するという建前は守るつもりらしかった。

その調教の次の手段は、おぞましい淫具の装着だった。失神から醒めたとき、聖巫女は下半身を二本の太い棒で貫かれていた。尾錠のついた革帯で腰を締め付けられ、革帯から垂れた太い革紐を股間に食い込まされていた。二つの穴に挿入された棒の端には金属の環が植えられていて、そこに革紐が通されているから、棒を抜き取ることは不可能だった。

「その張形はデコボコにしてあるからな。自分で押し込んだり捏ねくったりはできるぜ」

お妃様の慈悲に感謝することだな——と牢番が下卑た嗤いを聖巫女に投げつけた。

自分で自分を虐めるようなことはしなくても。立ち上がれば重みで自然と抜けかかるし、座れば金属環が座面に当たって張形を限界まで押し込む。しかも、その張形は——片時も存在を忘れられない太さだった。肛門を苛む張形ですら、王錫の宝玉ほどの太さだった。膣に挿れられたそれは、聖巫女の手首くらいはあったろうか。二つの穴は昼夜を問わず極限まで拡張されたままで、その責め苦から開放されるのは、朝に一回だけと定められた排泄のときと、夜の……。

「お愉しみの時間だぜ」

拷問人が聖巫女を牢屋から引き出した。革帯の尾錠をはずして、無造作に淫具を引き抜く。

じゅぼん——と卑猥な音が石壁に反響して。聖巫女の体液にまみれて妖しく光る黒い張形からは湯気が立っていた。

聖巫女は床にうつ伏せにされて四肢を背中へ引き上げられ、四つの環をひとまとめにし

た枷で拘束された。枷の中心に鎖がつながれて、天井の滑車で引き上げられていく。

「ぐう……う、う」

V字形に反りかえった裸身が宙に浮いた。両脚は自然と開かれて、淡い叢も、その奥の秘裂の内側までが、拷問人の目に晒された。

正妃は、運び込ませた豪華な革張りの椅子の中で毛皮に埋もれながら、自分よりはるかに若い少女の受難を見物している。その瞳は嫉妬と悪意で燃え盛っていたが、今日はさらに嗜虐の愉悦までが加わっていた。

「陛下は女にも容赦はせぬぞ。それでも気を遣れるものか、見定めてくれよう」

聖巫女の全体重は今、不自然にねじ曲げられた彼女の肩と股関節とに掛かっている。梯子で逆V字に折りたたまれる数倍の苦痛だった。

「まずは、おっぱいからだ」

拷問人の無骨な手が、うつ伏せにされても垂れ下がらない張りのある半球をわしづかみにして、柔肉に指を食い込ませながら半回転ほどもひねった。

「ひいっ……！」

全裸にされてなお優雅な振る舞いを忘れなかった聖巫女の口から悲鳴が迸った。それを耳にして、拷問人のズボンの前が大きく盛り上がった——のは、さも有りなんだが。

「なんと……」

聖巫女の大きく割り開かれた股間に潤いを見つけて、正妃が呆れた声を漏らした。

潤いは乳房を残酷に舐られるほど増していき、ついには透明な糸となって秘裂から垂れこぼれた。

それは——聖巫女として修行に努めた故のものではなかった。選別の儀式のおりに、まだ幼かったにもかかわらず、祭祀長に乳首を指で弾かれて官能に火を点し、肉芽を抓られて絶頂に達したのだ。そうしてみると、時空を司る父母神は、最初からこの娘を征服王に与えると定められていたのであろうか。

「こいつは鬍り甲斐が……失礼しました。仕込み甲斐があります。一万人にひとりの逸材です」

拷問人のへつらいにうなずいてみせた正妃だったが、はっきりと不興を顔に浮かべていた。

実のところ、征服王は嗜虐趣味を持たない。ただ女をおのが欲望のままに弄び、女が嫌がれば興味を失う。それだけのことだった。興味を失うのであるから、女を処刑するようなこともなく、場当たり기에下げ渡す。下げ渡された側も、女を気に入れば奴隷妾にするし、気に入らなければ下女にするか、いっそ娼館に叩き売る。

正妃は征服王の我武者羅な愛撫をけっして嫌いではない。けれど、聖巫女によって征服王が嗜虐に目覚めたら——自分がこのように吊るされて乳房をもぎ取られるほどに弄ばれる様子を思い描いて、ぞっとしたのだった。

そうさせないためには、征服王が辟易するほどの性癖を、この女に植え付けてやるしかない。

「思う存分、仕込んでおやり。十回気を遣るまで、休ませてはなりません」

正妃は毛皮にくるまったまま立ち上がり、足早に牢獄を去った。

「お許しも出たことだし。たあっぷり可愛がってやるぜ」

拷問人はポケットから細い革紐を取り出した。

「まずは、絞りだして——と」

乳房の基底部に革紐を巻いて、乳房が鞠のようになるまで引き絞った。それから細い糸で乳首を扼して。股間の肉芽も実核を露出させて同じように結わえた。その三本の糸を束ねて、握りこぶしほどもある鉄球に結ぶ。

「ぎいい……」

聖巫女は食いしばった歯の隙間から苦悶の呻きを押し出した。わずかでも身悶えすれば、今に倍する苦痛が三点を襲う。そんな目に遭わされながら、なおも花芯は蜜を滴らせていた。

「生殺しじゃかわいそうだよな。ちゃんと逝かせてやるぜ」

拷問人が手にしたのは、先ほどまで聖巫女の体内に埋まっていた張形と同じくらいに太く、さらにその上へ太い鉄線を粗く螺旋状に巻きつけた淫具だった。

ぐ……ぶっと、力まかせに押し込んで。ゆっくりと挿入を始めた。

「ひいい……ひっ……ひいい！」

挿入のつどに聖巫女の口から悲鳴がこぼれて。

「ひっ、ひっ、ひっ、ひっ……」

淫具の動きが早くなると悲鳴も切迫してきて。白濁した粘っこい蜜が際限なく鉄線に掻き出される。

「ひっひっひっ……ひいいい、逝く、逝くう！」

聖巫女の四肢が激しく痙攣して、そのまま動かなくなった。

しかし、失神の安息に逃げ込むことも、絶頂の余韻に浸ることも、聖巫女には許されていなかった。頭から冷水を浴びせられて意識を取り戻すと、二回目の絶頂に向けて——今度は、管が股間に打ち込まれるのだった。

5. 破滅の時

一週間にもわたって聖巫女はさまざまに罵られ、数え切れない絶頂を強制されて。しかし食事には一応の配慮がされており、責めの後には医師の手当ても手厚く、聖巫女はやつれることもなく、副王都に到着した日と同じ程度には健康を保っていた。

そうして、ついに。運命の日が到来する。

その日——朝には聖巫女の腰から淫具が取り去られ、いつにも増して滋養に富んだ食事を与えられた。昼過ぎには沐浴をさせられた。これは娼館や酒場と同じく、北辺王国が建てられて後に中心世界からもたらされた習慣だった。

何週間ぶりかの沐浴だったが、聖巫女にとっては辛いひと時だった。傷だらけの身体を、これが正妃の最後の意地悪だろうか、固いブラシでこすられて——けれど、そのおかげで手桶に一杯ほども垢がこそぎ落とされて、本来の肌の輝きが戻った。もちろん、鞭痕や枷でできた痣はそのままだったが、かえってそれが年若い娘に妖艶さを付け加えることとなっていた。

昼に比べてずっと軽い食事を与えられて。やがて夜も更けてから。巫女の正装を模した薄物一枚をまとって、聖巫女は征服王の寝所に招かれた。あるいは連行された。

暖炉で石炭が轟々と燃える寝所で、すでに征服王は下帯一本の姿になっていた。

薄物から透ける肌を鑑賞する風雅は持ち合わせていないらしく、裸になれとぶっきらぼうに命じる征服王。

衣服を脱ぐにしても、身をくねらせたりわざと背を向けたりと、そういった手管は通じないばかりか、かえって相手を苛立たせるだけだと、すでに聖巫女は感じ取っている。あっさりとして全裸になって、ベッドに近づき——手を引かれるままに身を投げ出した。

「ひどい傷だな」

意外と優しい口調で、征服王は聖巫女の肌を指でなぞった。

「こんな目にあわされて、女の悦びを感じるというのか？」

「こんな目にあわされても、です」

男にも女にもさまざまな性癖があるのだと、聖巫女は説いた。女を痛めつけて支配欲を満たす男には、そのように。女に虐げられて喜ぶ男にも、そのように。相手が女性でもかまわない。もっとも、その場合に交合相手の運命を読み取れるのは一部の伽巫女に限られていた。自分がそうなのかは、わからない。

「わたしのお相手が陛下で、ほっとしています」

「とは……？」

だいいちに、殿方である。そして、相手を虐めるよりは虐められることのほうが容易だった。巫女の共感能力をもってしても、相手がどのように虐められたいのか、相手がそう思っている、自分では気づかない願望もある。受身でいられるほうが楽なのだった。

「こんなことをされてもか？」

征服王の手が聖巫女の股間に差し入れられて、花卉を摘んで引き伸ばした。

「痛い……痛いだけです。だって……陛下は、こんなことを望んでおいでにならないのですから」

「では、どんなことを望んでいると思うのだ？」

「思うのではなく、わかるのです」

聖巫女は身体をずらして、征服王の股間に顔を近づけた。そして、息を呑んだ。

正妃があのように太い張形で聖巫女を苦しめていた理由がわかった。まだ半勃ちだというのに征服王の陽物は、すでにあの淫具と同じほどの太さがあった。正妃の行為は虐めではあったとしても、調教でもあったのだ。

征服王を受け挿れて無傷でいられるのは、正妃を除けば子を産んだ女だけだった。だからこそ正妃は寵愛を一身に集めていたのだし、聖巫女を調教しようという申し出に征服王は疑いを持たなかったのだ。

聖巫女は驚きを静めて、巨大な陽物の先端に舌を這わせた。

「立派なお道具であらせられます。じゅうぶんに湿らせておかないと……」

「おい、なにを……」

どうしても挿入かなわぬ娘を相手にするときは、口を代わりに使わせたこともある。脅して、それでも拒むなら鞭の十発もくれてやって。しかし、おのれから逸物を舐めに来た女は、これが初めてだった。

聖巫女は丹念に征服王の陽物を舐め、聖神殿で教わったとおりに、舌でさまざまな刺激を加えた。たちまちのうちに、陽物は聖巫女の二の腕よりも太くなった。

「では、失礼します」

聖巫女が馬乗りになろうとすると、征服王は怪訝な顔をした。彼にとって閨の作法はひとつきりだった。女を押し倒し、指で掻きまわして無理強いに潤わせ、のしかかって貫く。

聖巫女が膝立ちになって左手で陽物を股間にあてがい、右手で花卉をくつろげるのを、征服王は呆気にとられて眺めるばかりだった。

ず……先っぽが花卉を掻き分けただけで、当然だがつっかえてしまった。

聖巫女は何度か深呼吸をして、さらに大きく股を開いた。

「はああああ……」

息を長々と吐き出して、吐き終わる寸前に、脚の力を抜いた。

ぐうっ……ぎちぎちと音を立てて、巨大な陽物が花卉に埋没していった。

「くはあ……いっぱい。おなかの中、陛下でいっぱい」

挿入を終えただけで、すでに聖巫女は半ばまで浮揚していた。

太いから良いのではない。●4のときから本格的な修行を始めて、●5で祭祀長の指による破瓜を経験した。以来、指による刺激はもちろん、これほど太くはなかったにせよ男根を模した性具でさまざまな訓練を施された。

しかし。粘膜と粘膜との接触は決定的に違っているのだと、聖巫女は知った。他者と交わり、ひとつになる。それはまさに、魂と魂とが触れ合う一瞬であった。

聖巫女は落としていた腰をわずかに浮かし、膝の屈伸を始めた。すでに、引き裂かれるような苦痛は消失していた。聖巫女の肉壁は征服王の巨大な陽物に絡みつき、優しく包み、おびたしい蜜が無理を無理でなくしていた。

ずぶう、ぐじゅっ……膝の屈伸にともなって陽物が肉壺を出入りして、淫らにして性な

る調べを奏でた。

ずっちゅ、ずっちゅ、ずっちゅ……聖巫女は忘我の境地に達して、膝の屈伸を繰り返しながら、腰を前後左右に揺り動かす。

「あん、あん、あん……」

「う、むうう……こ、このような……」

征服王も、かつてない快樂の渦に巻き込まれて。一瞬たりとも長く、渦に翻弄されていたいと願う。

しかし、運命の瞬間が容赦なく迫る。

「あ、ああっ……陛下、陛下あ！」

征服王の誕生以前から現在までの『あり得たかもしれない過去』が『現在』に凝縮して、二人の結合部で爆発して、数世紀先までの『あり得るかもしれない未来』が目も眩むばかりの光の中で一気に展開した。その爆発は征服王が世界を揺るがすほどの力を持つが故に激甚で、その広がりや輝きは聖巫女の偉大なる能力故に広大で目映く……

「ぬおお！ 出る。出すぞ！」

聖巫女がかつてない絶頂を極め。その魂が、未来に向かって無限に広がる時空のタペストリーから垂直に、はるかな高みまで飛翔したと同時に。

6. 滅びのタペストリー

「うわああああっ！」

征服王が絶叫した。

「やめろ！ やめろ！」

征服王は、がばと身を起こして聖巫女を突き飛ばした。ベッドから転げ落ちて壁に頭を打ちつけ昏倒した聖巫女など、気にも留めない。

「銀狼将軍が余を裏切るなど、あり得ぬ。兄の仇だと？ あの小姓にそんなだいそれた真似ができるはずもない。折衝大臣が南白王国と……馬鹿な。飢饉が余のせいだと？ 天候までが余に逆らうのか?? 陸に上がった海賊ごときに北辺王国の精鋭が惨敗するなど、断じてあり得ぬわ！」

目くるめく射精の快感——と共に、征服王は聖巫女が観じた未来の一部を共有した。その、あり得るかも知れぬ未来。銀狼将軍が謀反を起こす前に誅殺すれば、そこに生じた警護の隙を突いて小姓に寝首を掻かれ、小姓を遠ざければ折衝大臣が小姓の出身国に籠絡されて北辺王国に不利な条約を結び……どのように布石を打とうとも、王国は滅び征服王は暗殺される。しかも、当面の危機を回避するための対策が後日のより大きな禍を招き寄せて、北辺王国はおろか中心世界までも巨大な災厄に巻き込んで、百万、いや千万を超える人々が死ぬ。

あり得るかも知れぬ未来の、いずれかを征服王は選び取らねばならない。無限に広がる横糸の一本を選んで縦糸を手繰れば——すべての未来は征服王の横死と世界の滅びとを織りあげるのだった。

「このようなまやかし、余は信じぬぞ！ これはそなたが見せた偽りであろう！」

征服王は狂乱していた。滅びの根本原因は、おのれが始めた覇業にあるとは——おのれの一切を否定されて、そして、これがまやかしではなく時空神の定めた運命であると直観するだけの資質に恵まれていたが故に、狂乱せずにはいられないのだった。

「……これが定め。わたしの使命なのですわね」

昏倒から醒めた聖巫女は征服王の狂態を眺めながら、世界の命運を一身に預けられた重責に押しひしがれていた。しかし、急がねば。

まさか後頭部を強打したせいではなかろう。爆発が凄まじく、タペストリーがあまりに広く、しょせんは生身の人間たる聖巫女の精神が耐えられなかったのだらう。タペストリーのあちこちに亀裂が生じ始めていた。タペストリーが碎け散らぬうちに、聖巫女は語るべきことを語らねばならなかった。為すべきことを成さねばならなかった。

征服王が観じた未来は、聖巫女が一瞬のうちに総覧したスペクトラムの、ごく一部でしかない。

征服王がどのように行動しようとも、どの糸を選ぼうと、世界は征服王とともに滅びる。すべては、北辺王国が築かれたときに定まった運命であった。

しかし。世界を救うべく父母神から遣わされた聖巫女には、光り輝く未来へと伸びるただ一本の縦糸が見えていた。その縦糸をわずかでも踏みたがえれば、東方世界の横糸までも断ち切ってしまう危険な道。過たず渡りおおせたとしても、無残な犠牲が累々と横たわる——鬼畜のゴールデンパス。

数百万の餓死を防ぐには、東方世界までが征服王に屈さねばならない。征服王の軍団を無敵にするには、幼い王女が数百人もの兵士にみずから身体を開かねばならなかった。

キーワードは三つ。被虐妃、ミスリル騎士団、悦虐娼婦。

東方世界の処女姫には、聖巫女のような予知能力はない。悦虐の素質すらない。しかし、彼女の持つ無限の自己犠牲の精神が世界を救う。征服王から嗜虐の性癖を引き出す。

彼女は三つの馬に乗らねばならなかった。妹の命を購うために、北辺の王都まで吹雪に晒されながら全裸の騎行を強いられる。降伏した民からの略奪を諫めて征服王の逆鱗に触れ、十日間を三角木馬の上で過ごす。馬車競争に勝って、税制の公平に関する嘆願を聞き届けもらう。人馬にされた妹の背中を厳しく鞭打って。

ミスリル騎士団は……

(ああ、タペストリーが千切れてゆく……)

しかし、おのれの運命はまだ見えていた。

脅しを交えて、聖巫女が征服王の助言者として留まる方策も見えている。しかし、それは滅びの縦糸だった。征服王ほどの男が、女の操り人形で満足できようか。しかも、その女はとっくにスペクトラムを失っているのだ。

聖巫女は勇気を振り絞って、征服王をゴールデンパスへと導く言葉を紡いだ。

「陛下とわたしが共有しました観相には、未だ織りあがっておらぬ箇所が幾つもあったはず。そこにこそ、滅びを避け王国を繁栄に導く道があったのかもしれない」

「そうに決まっておるわ！ 来い。今一度、試してください」

聖巫女はゆっくりと首を横に振った。

「無駄でございます。すでに、わたしの糸は尽きてしまいました。あと五年、いえ三年の後でございましたら、タペストリーを織りあげることもできたはず」

この台詞はゴールデンパスへの道標だった。以後の征服王は、より慎重になり、助言を聞き容れるようになる。

「余のせいだと申すのか？」

「祭祀長の嘆願をはねつけたのは、陛下でございます」

「ううぬ……」

「されど。力及ばなかったのは、わたしの罪でございます」

聖巫女は言葉を切った。この先を言えば、彼女の運命は決する。しかし、聖巫女のこれからの凄惨な生涯など——ミスリルの落胆（それが具体的にどういうことか、すでに聖巫女にはわからなくなっていた）の腹いせにされる幼い姫への謝罪にすらならない。

7. 運命の果て

「陛下。このわたしを、連れ帰られた二十名の伽巫女ともども、死刑に処してくださいませ」

「死刑など、まだるっこしい。この場で成敗してくれるわ」

征服王は壁の大剣に手を掛けたが、思いなおしたようだった。

「いや。おまえには、もっとふさわしい罰を与えてやる」

その下腹部に逆賊の焼印を施し、最下級の娼婦として娼館へ払い下げてやる。娼館がもっとも嫌う客、すなわち女を甚振る趣味の客ばかりをあてがってやる。

「おお……お慈悲でございます。その剣で首を刎ねてください」

それは道標の言葉ではなかった。思わず漏らした本心だった。悦虐は——すくなくとも、共感能力の高い聖巫女においては、そこに相手が性的興奮を覚えるからこそ成り立つのだ。復讐のために虐げられるのとは根本的に異なる。

「慈悲など与えてやらぬ。夜毎に縛られ、鞭打たれ、三つの穴をことごとく蹂躪されながら、余が世界を切り従える様を存分に見ておれ」

——こうして、ゴールデンパスは開かれた。

予知者が傍らにあれば心強いと征服王は考え、南進を取りやめ、神秘を求めて東方に矛先を転じるだろう。そこで将来の被虐妃たる処女姫を……

(おお、なぜ……!?)

聖巫女は戦慄した。

すでに原形を留めぬまでに碎けて原初の暗黒に落ちてゆくタペストリーの断片。そのひとつ——それがゴールデンパスの一部だということくらいは、まだ見分ける力が残っている。じゅうぶんに若い、おそらくはまだ被虐妃と呼ばれる以前の、しかし処女姫ではなくなって久しい東方世界の姫が、首枷を着けられ足を鎖でつながれて、裸の尻と背中を鞭打たれながら、娼館への道を歩いている。娼館の門前で客寄せの看板代わりに磔に掛けられ

ているのは、悦虐娼婦に堕ちた聖巫女だった。

東方世界の姫も征服王の勘気をこうむって、娼婦に堕とされるのか。それではゴールデンパスが途絶えてしまう。

それとも……このような場面が、今は記憶からこぼれ落ちていくゴールデンパスに刻まれていたのか。

そうして。未来の被虐妃とかつての聖巫女との邂逅は何を意味するのか。

惑乱する聖巫女。

征服王が衛兵を呼んで聖巫女の処置を命令するのも、彼女には別世界の出来事でしかなかった。

最後に見たゴールデンパスの欠片と同じ姿にされて、鞭打たれるかわりに剣先で尻をつつかれながら、聖巫女は宮殿から娼館への長い道を歩き始めるのだった。

序章 完

注記

ミスリス・サーガ本編は、序章を忠実になぞっているものではありません。

ここに登場する征服王と本編のクローブ国王グスタフ・シュリックとを同一人物と見做すと、時間の流れに破綻をきたします。

この書物に収められた各エピソードは、散逸した古文書の断片から再構築されたものでもお考えください。

「弄っているうちに大きくなっちゃった」のに、再構築の努力を放棄した（書きたいものが沢山あるのです）言い訳ですね。